

奏



2014 AUTUMN VOL.42



第8回 大阪国際室内楽 コンクール&フェスタを振り返って

薫風さわやかな五月、いずみホールにて第八回「大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」が開催されました。ハイレベルと評されるコンクールでは、予備審査を通過した世界九カ国から二十二団体が腕を競い合いました。一方、世界で例を見ない室内楽の祭典であるフェスタには、世界二十四カ国から百三団体もの応募があり、出場の権利を手にした十九カ国から二十団体が参加し、夢と感動を分かち合いました。今回、深くかかわって頂いた方々にお集まり頂き、貴重なお話を伺いましたのでご紹介しましょう。



左より原口さん、日下部さん、瀧本さん、梅本さん、玉越さん

それぞれの個性と実力が見事に発揮されており、本当に素晴らしいかったです。——原口

日下部 今回もとてもハイレベルで良いコンクールだったと思います。日本でも非常にユニークな存在であり、意義ある催しだと自負しておりますが、今後はいかに続けていくかが課題です。そこで、今回の感想をはじめ、今後さらに良いものにしていくためのご意見などをお聞かせ願いたいと思います。

原口 このコンクールは以前から存じておりましたが、今回初めて雑誌「シヨパン」の取材で拝聴させて頂きました。とにかく驚いたのは、とてもレベルが高かったこと。仕事柄、様々なコンクールを見ますが、この



原口さん

日下部 なるほど。では、ヴィオラ奏者としてコンクールに初出場した瀧本さん、感想などを含めてお話し下さい。

瀧本 私たちのクアルテットは、小澤征爾先生の講習会で一緒



瀧本さん

に演奏したのがきっかけで、昨年結成し、今年「大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」とイタリアの「パオロ・ボルチアーニ国際弦楽四重奏コンクール」が

演奏の水準や来場者数が増え、と右肩上がりであるような気がします。——梅本

日下部 では、初期の頃から審査委員を務める梅本先生お願います。

梅本 私は第四回から審査委員として参加していますが、演奏の水準や来場者数が増え、と右肩上がりである気がします。こうした現象は日本の現状を考えると稀有なことで、大阪人として誇りに思っているのではないのでしょうか。私の音楽人生の中で、室内楽だけに十日間特化することは、まずないですね。そんな得難い機会を、地元大阪で体験できるのは幸せなことだと思っております。



梅本さん

日下部 プロデューサーである玉越さん、お願いします。

玉越 今回第一部門も第二部門も皆さん本当に上手で素晴らしいかと思っております。優勝



玉越さん

した団体だけが良かったというのではなく、参加した全員がとにかく素晴らしい。また、審査委員も室内楽に長けた先生方が多くて良かったように思います。東京クアルテットのマーティン・ビーヴァー先生、ハーゲン・クアルテットのライナー・シユミット先生、他、現役の先生も数多くいらつしやいました。以前はどちらかというソリストの先生が多かったように思います。さらに、半年以上もかけてピアノトリオとピアノクアルテットの課題曲を厳密に選んだのも良かったと思っております。それと、知名度を上げるため、いずみホールで日下部先生に司会をして頂いたアタカククアルテットのプライベートやチケットの直接販売、その他様々なレクチャーコンサートや作曲家の西村朗先生の講演会など、新たなことをたくさん実施しました。中でもライブストリーミングは、海外からのメール



日下部さん

で再放送の依頼もあり、効果を実感することができましたね。ただ残念なのは、直接集客効果につながりやすかったことです。

梅本 でも、今までの中で一番来場者数は多かったですよ。

玉越 今回はハワイや韓国から室内楽専門の団体が取材に来るなど、多種多様な方がおられて楽しかったと思います。

日下部 私はコンクールを企画した段階から参加しています。音楽監督に岩淵龍太郎先生を招き、弦楽四重奏とその他の編成の二部門でコンクールがスタートしました。また、様々な形式まで広げたいフェスタですが、こうしたユニークなスタイルは、世界中でも珍しいと思います。先程、原口さんが大

【玉越 邦彦】

【原口 啓太】

【瀧本 麻衣子】

【梅本 俊和】

【日下部 吉彦】(司会)

1972年、住友生命保険相互会社入社。1997年、日本室内楽振興財団に転出。2012年、住友生命保険相互会社退職。引き続き日本室内楽振興財団で勤務。第3回～8回大阪国際室内楽コンクール&フェスタのプロデューサー。

早稲田大学第1文学部文芸専修卒業。音楽之友社に入社し、「ステレオ」編集部、「レコード芸術」編集部、ONTOMO MOOK 創刊を担当。月刊「SevenSeas」編集部、産経新聞「モーストリー・クラシック」編集部を経て、2011年から2014年8月まで月刊「シヨパン」編集長。現在はフリーランスの音楽ジャーナリスト。

大阪音楽大学ピアノ科卒業。1967、1977年に大阪文化祭賞受賞。1975年、大阪文化祭奨励賞受賞。日本ピアノ教育連盟等、様々な委員会において、委員長、副委員長を勤める。現在、大阪音楽大学名誉教授。CD「ソナチネアルバム」他をリリース。第8回大阪国際室内楽コンクール審査委員、フェスタ副審査委員長。

1952年同志社大学英文科卒業。同年朝日新聞入社。58年朝日放送に転じ、音楽番組プロデューサー、解説委員を経て解説委員長を歴任。音楽評論の第一線で活躍中。大阪音楽大学客員教授。第8回大阪国際室内楽フェスタの審査委員長。

PROFILE

敬称略

阪らしい」と言われたエンターテインメント性やパフォーマンス性は、少々問題点かもしれないですが、ユニークさの表れではないでしょうか。では、今後も右肩上がりのままで継続するための方法を、皆さんで考えたいと思います。

原口 今回、ライブストリーミングを実施されたことは、非常に大きな第一歩だと思います。**瀧本** そうですね。

玉越 今回のコンクール前に、今回のコンクールの模様を流したりもできますね。

原口 世界中でネットから聴けるのは、非常に大きな影響力

を与えると思います。

玉越 最初はしないつもりだったのですが、すぐにできると聞いて実施しました。反響はありました。時差を考慮に入れないといけないですね。できたならアーカイブにして、ヨーロッパ向きの時間帯で実施するのもありかなと思います。

原口 ライブストリーミングはオンタイムで流すものなので、時差の問題などもあります。が、アーカイブなら、いつでも何度でも見られるのでお勧めです。でも、ライブストリーミングでも、情報はツイッターやフェイスブック、メールなどで瞬時に拡散するので、集客効果につながると思います。これは雑誌や新聞とは違う効果ですね。

日下部 私が出演しているFM番組も、インターネットで発信しているため、世界中からリスナーのメッセージが届きます。これは、ある意味恐ろしい時代になったと感じますね。

梅本 意外な反響があったりしますね。昨日まで無名だった

人が突如有名になつたり…。

原口 そうですね。自分の演奏をインターネットに上げて有名になる人もいます。例えば、ウクライナ生まれのリシツツァというピアニストは、大きなコンクールなどには出演せず、自分の映像を上げていたところ、メジャーレーベルが目を付けてデビューにつながりました。日本でもそうした活動をする人もいます。

梅本 それは必要ですね。ユーチューブで自分のリサイトを上げてらっしゃるのを見て、こんなことができるんだと驚きました。世界中で見られるんですからね…。また、先ほど玉越さんが話された選曲作業についても、ネット上で譜面や映像を簡単に見ることが出来ますね。特にピアノクアルテットの曲は希少で、ライブラリーがあるわけ

もない。それが自宅ですぐ手に入るんですから、本当に便利な時代ですよ。

原口 CDを探すよりもユーチューブを探した方が断然探しやすいことありますね。

梅本 そうですね、審査委員のパスカル・ロジェ先生はiPadに譜面を全部入れて、譜面を見ながらピアノソロの演奏を聞いてらっしゃいましたよ。

日下部 瀧本さんはこのコンクールをどうして知りました？**瀧本** 広告を見たのもありますが、ヴィオラの川本嘉子先生からこのコンクールのことを詳しくお話ししていただきました。日本でクアルテットのコンクールというのは珍しいので興味を

持ったんです。**日下部** 実際に受けてみた感想はいかがですか？**瀧本** ソロのコンクールとはまた全然雰囲気が変わりましたね。クアルテットなので、ソロのピリピリした感じがなく、どちらかというと全然コンクールっぽくなくて、雰囲気がとても良かったです。

たね。演奏だけでなく、堤先生のお話も聞いて無料ですから、非常におトク感のあるものだったと思います。**原口** 例えば、二次予選で落選した人や外国から来られた方に演奏して頂いて、街を盛り上げるのも良いと思いますね。**日下部** 瀧本さんは、今回そのうしたアウトリーチ的なことをしていたのではないですか？**瀧本** そうですね。その後もコンクールが控えていましたから、レクチャーコンサートで演奏できたのは良かったです。二次予選用の曲も弾きたかったです。



日下部 瀧本さんもインターネットを見ましたか？**瀧本** はい。他のクアルテットも見ることもできるので。

中国の人は音楽感覚も全然違いますし、今までにない刺激を受けます。——**瀧本**

日下部 瀧本さんのクアルテットはインターナショナルなので、メンバー全員で一緒に練習するのは難しかったですよ。

瀧本 そうですね。今後は、みんなで集まれる場所を作らなければいけないと考えていて、今はそのためにいろいろと話し合っている最中です。



ヤナ弦楽四重奏団(右が瀧本さん)

日下部 その場だけでクアルテット結成ではなく、もう少し恒常的な活動が欲しいと考えているので、共感します。集まるのは難しくても、インターナショナルな部分は面白いことでもあるでしょう。**瀧本** そうですね、すごく良



アルカディアクアルテット

外国のコンクールに出掛けると、街全体が華やいだ雰囲気になつている。——**日下部**

日下部 告知するための対策として、アウトリーチがあると、街全体が華やいだ雰囲気になつているんですね。そうした盛り上げ方が大阪には欠けているように思います。

原口 同感ですね。**玉越** 一度ツイーン21で実施したことがあります。昼休みに人が通りかかるくらいで、少し空振りな感じでした。

日下部 やはり続けなければ意味がないのかもしれない。今回はレクチャーコンサートも実施したでしょ。

玉越 天満教会で実施しまし



原口 当然、二次予選用の曲も練習していますもんね。**瀧本** はい。それこそイタリアに行った時にはアウトリーチがたくさんあって、落選した人の方が忙しいのではないかと思うくらいでした(笑)

8th コンクール&フェスタ フォトメモリー

Finale

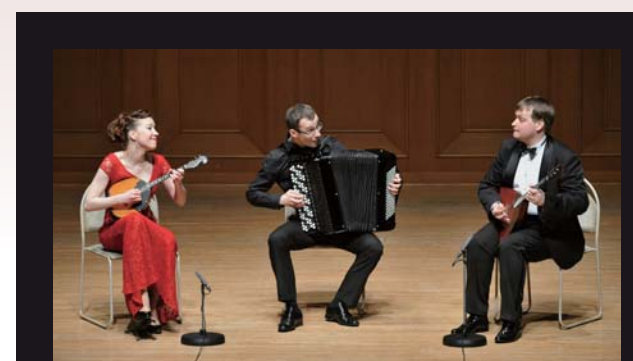
Start



披露演奏会 東京公演(トリオ・ラファール)



いよいよ審査発表



フェスタ:トリオ・パラフレーズ(フォークロア特別賞受賞)



バナーも掲示されOBP周辺はコンクールの雰囲気



披露演奏会 大阪公演(ダスクライネ・ヴィーン trio)



優勝決定の瞬間(アルカディア・クアルテット)



第2部門:トリオ・アドルノ(奨励賞受賞)



世界の一流音楽家も審査委員として来日(歓迎パーティー)



記念パーティーでの喜びの弁(アルカディア・クアルテット)



盛大に行われた表彰式(いずみホール)



第1部門:クアルテット・ソレイユ



参加団体第1弾来日(ホテルグランヴィア大阪)



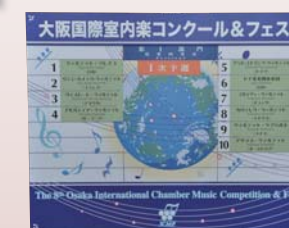
各部門の優勝団体を一堂に会しての記者会見(ホテルニューオータニ大阪)



越智理事長から表彰状を手渡されるダスクライネ・ヴィーン trio



いずみホールに入る参加団体



翌日の1次予選を前に真剣に練習する参加団体

いよいよコンクールスタート(第1部門1次予選)

グランプリ受賞団体

👑 第2部門(ピアノ三重奏及びピアノ四重奏) 👑

1位

トリオ・ラファール(スイス)

Trio Rafale (Switzerland)



マキ・ヴィーダーケアー…………… ピアノ
 ダニエル・メツラー…………… ヴァイオリン
 フルリン・クオンツ…………… チェロ

チューリッヒ芸術大学の学生3名がM.ラヴェルのピアノ三重奏曲を共に演奏したことがきっかけとなり2008年にトリオ・ラファールを結成。2009年からスイスのエックハルト・ハイリガーズ教授に師事。同トリオは、2011年リヨン国際室内楽コンクールにて2位に、更に同年著名なメルボルン国際室内楽コンクールで優勝する等、主要なコンクールで数々の賞を受賞している。

Message

今ヨーロッパでは、ピアノトリオがブームになっています。ピアノトリオは素晴らしい曲がたくさんあって、飽きることはありません。私たちはソロ活動もしていますが、トリオの仕事は絶対に続けます。来年、グランプリ・コンサートでまた日本に来られることがとても楽しみです。

2位

ノトス・クアルテット(ドイツ)

Notos Quartett (Germany)



アントニア・コスター…………… ピアノ
 ジンドリ・レデラー…………… ヴァイオリン
 マルテ・コッホ…………… ヴィオラ
 フロリアン・シュトライヒ…………… チェロ

ノトス・クアルテットは、パークハウス・アワード(ロンドン)、チャールズ・ヘンネン・コンクール(オランダ)、ヴィットリオ・ガイ国際室内楽コンクール(フィレンツェ)で優勝など、数々の国際室内楽コンクールにて受賞歴を持つ。ロンドンのウィグモアホール、アムステルダムのコンセルトヘボウ、ベルリンのコンツェルトハウスなど、主要な音楽祭での演奏・ラジオ出演など様々な活動を行っている。

3位

トリオ・アタナソフ(フランス)

Trio Atanassov (France)



ピエール=カロヤン・アタナソフ…………… ピアノ
 ペルスヴァル・ジル…………… ヴァイオリン
 サラ・スルタン…………… チェロ

トリオ・アタナソフは、2007年パリにて結成後、数々の主要な国際ピアノ三重奏コンクールで入賞している優れた若手ピアノトリオ。コメルツバンク国際コンクール(フランクフルト)で優勝、またトロンハイム国際室内楽コンクール(ノルウェー)、ハイドン国際室内楽コンクール(ウィーン)、ヨゼフ・ヨアヒム国際室内楽コンクール(ワイマール)など数多くのコンクールで入賞している。ヨーロッパ室内楽アカデミーのメンバー。

👑 第1部門(弦楽四重奏) 👑

1位

アルカディア・クアルテット(ルーマニア)

Arcadia Quartet (Romania)



アナトローク…………… 第1ヴァイオリン
 レスヴァン・ドゥミトル…………… 第2ヴァイオリン
 トライアン・ポアラ…………… ヴィオラ
 ツォルト・トローク…………… チェロ

ルーマニアのゲオルゲ・ディマ音楽アカデミーで出会った4名が、アルカディア・クアルテットを2005年に結成。その僅か4年後の2009年ハンブルグ国際室内楽コンクールで優勝、2011年アルメレ国際室内楽コンクール(オランダ)で優勝、2012年には著名なロンドン国際弦楽四重奏コンクールで優勝。2012年以降、世界の主要な音楽祭に多数出演している。

Message

コンクールに参加することはいい経験になるし、レパートリーも広がります。でも、年齢制限の関係で、コンクールを受けられる最後のチャンスに大阪を選びました。このコンクールは参加団体のレベルが高いことで世界でも有名だし、優勝したらアジアでも自分たちのことを知ってもらえるので、頑張りました。

2位

カヴァレリ・クアルテット(イギリス)

Cavaleri Quartet (UK)



マーティン・ジャクソン…………… 第1ヴァイオリン
 キアラン・マケイブ…………… 第2ヴァイオリン
 アン・ベイルビ…………… ヴィオラ
 ロイナ・カルバート…………… チェロ

カヴァレリ・クアルテットは2011年プレミオ・ボルチアーニ弦楽四重奏国際コンクールで特別賞を受賞。2012年にハンブルグ国際室内楽コンクールで優勝。近年の活動としては、メクレンブルク・フォアポンメルン音楽祭、シューベルティアデー、オーストリア音楽協会、ウィグモアホール、マドリッド国立音楽堂、モスクワ・ラフマニノフ・ホールにて演奏している。

3位

ヴァスマート・クアルテット(アメリカ)

Wasmuth Quartet (USA)



ジオナサン・オング…………… 第1ヴァイオリン
 ブレンダン・シェイ…………… 第2ヴァイオリン
 アビゲル・ロジャンスキー…………… ヴィオラ
 フレン・ハガティ…………… チェロ

2013年の結成以来、ヴァスマート・クアルテットはアメリカやヨーロッパ各地で精力的に演奏活動を行い、数多くの賞を受賞している。最近では、インディアナ州ブルーミントンのカットナー弦楽四重奏コンクールで優勝、全米フィショフ室内楽コンクールにて銀賞を受賞している。そして、ドイツ・ボンにあるベーターベンハウスのレジデント・クアルテットに任命されている。

楽団探訪

京都フィルハーモニー室内合奏団



室内楽コンサートシリーズ第48回

一人一人がソリストの個性派揃いのプロの合奏団「京都フィルハーモニー室内合奏団」(以下「京フィル」)を訪ねました。

京フィルは「クオリティは高く、ステージは楽しく」というポリシーで、定期公演、特別公演、室内楽コンサート、子供のためのクラシック入門コンサート等を主催すると同時に、各地のホール、教育委員会、鑑賞団体、テレビラジオ、芸術祭に招かれるなど精力的に演奏活動を続けています。楽団創設からのメンバー小林明理事長と下田雄史事務局長にお話を聞きました。

◆京フィル誕生

一九七二年五月、京都市立音楽短期大学(一九六九年京都市立美術大学と統合し、現在は京都市立芸術大学)を卒業した小林理事長が卒業後も演奏を続けたい、純粹に演奏で食べて行こうと同級生十人で演奏活動を始め、京フィルが誕生した。

参加したメンバーの中にはすでに就職していた人もいたが、仕事を辞めて参加、発足当時スポンサーもなく、仲間たちで営業を行うなど、手探り状態の中、活動を始めた。営業は参加した同級生の一人が、学校廻りで小さなアンサンブルをやっていたことから、子供に生の音楽を身近で聞いてもらおうと、小中学校に声をかけた。そして、近隣の学校から呼んで

もらえるようになり、高度成長経済の中、千人規模のマンモス校から声がかかり、生徒から二百円程度を集めてもらい、それが楽団員のギヤラになった。

◆演奏会活動

京フィルの演奏会活動は小中学校の生徒たちを対象に始まり、一九七〇年代後半には日本昔話の常田富士男さんと共に、語りオリジナルな楽曲をつける「音楽物語」として全国の小中学校や公共のホールを回った。活動の大きな柱となったこの学校音楽鑑賞会ではこれまでに全国各地の延べ三〇〇校二〇〇万人以上の子供たちに楽しい音楽を届け続けている。

弦楽四重奏などを含めた室内オーケストラ。狂言、文楽、ポピュラーなどほかのジャンルとのコラボ

ボレーション。〇歳児を含めた、キッズコンサートを中心として演奏活動を続けている。

文楽との共演では「曾根崎心中」にチャレンジし、三味線と浄瑠璃の代わりによりオーケストラとオペラ歌手によるクラシック音楽で筋を進めて行き、人形の足隠しはなくすべて見えているという、通常の文楽では見られないシーンを実現した。

子供たちに生の音楽を聞いてもらうことには今でも力を入れており、〇歳児から入れる、「はじめのクラシックコンサート」は年三回自主公演し、毎回千人以上の親子が聞きに来ている。

◆室内楽について

弦楽四重奏などの室内楽コンサートも京都市中京区の京都文化博物館別館ホール(旧日本銀行

行京都支店)などでこれまでに四十八回の公演を行い、多くの室内楽ファンを楽ませている。

京フィルでは管楽器、木管楽器、弦楽器、ソプラノ歌手のメンバーがコンサートごとに小オーケストラを編成する。他の楽団にはない楽器編成のアンサンブルで自分たちで編曲したり作曲した楽曲のコンサートをやっている。小林理事長は、聴きに來るお客様は、弦楽四重奏だから来るというのではなく、楽しいアンサンブルと、会場の雰囲気を楽しみに來るのではないかと思っている。

しかし、音楽大学などではピアノ、弦楽器、管楽器など個別の楽器のレッスンとオーケストラの授業はあっても、弦楽四重奏、木管五重奏など多様なアンサンブルのレッスンは少ないのではないかと残念に思っている。

◆楽団運営の現状

京フィルの志は演奏してそれを生活の糧にすることだが、現在の経済状況では楽団の運営は厳しい。学校も少子化で生徒数も大幅に減少しており、以前のようには学校自体が京フィルを呼べない状況になっており、地方自治体の援助もほとんどないのが現状となっている。小林理事長によ

ると創立四十三年目の今が一番厳しいとのことだ。

◆新たな企画に挑戦

今年四月には初めて音楽監督に齊藤二郎氏を招き、定期公演で日本人作曲家の作品を多く手掛けていくことも考えている。京フィルでは東日本大震災以降、復興支援のため何度も、岩手県宮古市、福島県郡山市などでコンサートを行い、来年三月には郡山市で中学生とのコンサートを企画している。郡山市は東北のウィーンと呼ばれる、クラシックなどの音楽活動が盛んに行われており、市にはオーケストラ部のある公立中学校が三校ある。今回は現地の中学生とベートーヴェンの第九の演奏を予定しているが、少し資金不足で、カンパを募っている。

京フィルではいい演奏、楽しい演奏を提供すればお客様もついてきてくれることを原点に、今後は定期公演でも能や狂言とのコラボレーションを企画したり、大阪の御堂筋や中之島界隈のオフィスビルやホテル、音楽ホールなどで行われている大阪クラシックのような街角コンサートを京都の三条通でできないかなど様々な挑戦を続けている。

👑 フェスタ部門(2~6名のアンサンブル 楽器編成は自由) 👑

メニューイン金賞

ダス・クライネ・ヴィーン・トリオ (オーストリア)

Das Kleine Wien Trio (Austria)



ヤセック・オブスタルシク…………… ピアノ
クシシュトフ・ココゼスキ…………… ヴァイオリン
ヤセック・ストラルシク…………… ヴァイオリン

2001年の結成以来、ダス・クライネ・ヴィーン・トリオは、バッハ、モーツァルト、ベートーヴェンといった古典派作品からロマン派、さらにはジャズやポップスなどの作品まで幅広くレパートリーを広げている。ヨーロッパ各地での公演を成功させ、2011年にはウィーン楽友協会にてデビュー。2012年より同トリオは、メニューイン財団主催「ライブ・ミュージック・ナウ」のメンバーになり、各地で活動している。

Message

メンバーとは子供の頃からの友達で、トリオを組んで13年になります。ピアノとヴァイオリン2丁のトリオなので、オリジナルの曲は少ないため、有名な曲を自分たちでアレンジして色々なスタイルで演奏しています。この優勝でコンサートが増えることを楽しみにしています。

銀賞

カリヨン (デンマーク)

Carion (Denmark)



アナタトカ……………フルート
エギルス・ウバトニークス……………オーボエ
エギルス・シェファース……………クラリネット
デヴィッド・パルムクヴィスト……………ホルン
ニルス・アンダース・ヴェドステン・ラーセン…ファゴット

木管五重奏団カリヨンは、2004年デンマークラジオ室内楽コンクールなど幾多の室内楽コンクールで入賞しており、2006年マルコ・フィオリノ国際コンクールで優勝、2011年の大阪国際室内楽フェスタで銅メダルを獲得している。同アンサンブルは、木管五重奏のジャンルに新たな生命を吹き込んでおり、多くの曲を初演している。カリヨンは音楽創作を通じて、クラシック音楽、現代音楽の芸術を視覚的なものとしている。

銅賞

打楽器集団「男群」(日本)

Percussion Group "O-Gun" (Japan)



山澤 洋之…………… マリンバ
田中 まさよし…………… ビブラフォン
清水 優…………… シロフォン
齋藤 伸也…………… グロックンシュピール
西窪 峰人…………… タイゴング
小畑 寛……………

1998年のアンサンブル結成以来、豪快かつ繊細な音楽性によって繰り広げられる「男群」のレパートリーは、多くの方面より支持を受ける。日本各地で多数の公演を重ねている。またメンバーによる作曲や編曲の活動も同アンサンブルの特色の一つで、自由な発想による作曲が多数、出版・発表されている。



音楽雑感



大阪大学大学院文学研究科教授

伊東 信宏

伊東信宏（いとう のぶひろ）プロフィール
一九六〇年京都市生まれ。大阪大学文学部卒業。同大学院修了（文筆士）。リト音楽院（ハルビン）などに留学。大阪教育大学、大阪大学准教授などを経て、現職。著書「バルトーク」（中公新書、一九九七年）で吉田秀真、「中泉政直の回顧」（岩波書店、二〇〇九年）でサントリー学芸賞を受賞。「バルトークの民謡音楽編曲」（大阪大学出版会、二〇一二年）がある。

音楽の「効果」と代作問題

先日、突然、某テレビ番組の制作スタッフ、という人からメールが来た。あんまり詳しく書くとは番組名がわかってしまいうので、少しぼやかしておくと、要するに失恋して落ち込んでいる時に聴くと良いのは「アップテンポな曲」よりも「泣けるバラード」だ、と番組で紹介したので（その理由は「悲しい時には悲しい曲を聞いた方が、副交感神経がどうこうなので、リラククス効果を高める」とかいうもの）、この主張を裏付けてほしい、という話。たぶん、裏付けがとれず、上司に怒られて「音楽理論」とか「楽理」の先生っぽい人に片っ端からコンタクトとってるんだろうな、と思いつながら、「誰か他の人にきいて下さい」と即座にお断りしたのだが、その主張が色々な意味で、あまりにも兆

候的なので印象に残った。どんな点で兆候的か、ということを中心よと列挙してみよう。

①この人にとって音楽というのは「アップテンポな曲」と「泣けるバラード」に分類できるらしい。そして、それは特に説明も要らない周知の前提だ、と考えられている。

②音楽というのは、聴くと何らかの効き目があって（「リラククス効果」）、それが身体に良かったり悪かったりする「サプリメント」のようなものだ、としか捉えられていないらしい。

③自分が思いつく素朴な疑問はどんなものであれ大切であり、すぐに答えられねばならない。すぐにわからない場合は、文献を調べたりしているより、学者に聞くのが手っ取り早い。

④学者というのは、普段自分の好きなことをして生きていく不届きな人間であり、こういうときにこそ世の役に立つべきだから、聞いてみる。まず③と④については、「税金使つて研究してるんだから、世の中の役に立つことをしなさい」というような話を立て続けに聞かされてイライラが溜まってるので、ちよつと愚痴になつて長くなりそうだから、ここではヤメておこう。①と②は結構根の深い問題だと思う。

何年か前、音楽学者の岡田暁生さんが、芸術にあまりにも安易に感動を求めていると、そのうち「感動」を呼び覚ます錠剤が売り出されるのではないか、というような話を聞いたのを思い出すが、これは冗談ではなくて、実はすでにかなり現実化しつつあるような気

がする。大学の演習で学生に聞いたところによると、J・P・O Pには「せつな系」というジャンルがあるそうで、西野カナが代表例だとか。西野カナには、すでに「ギャル演歌」という卓抜な命名をした人がいるそうだが、とにかくあの種の「せつない、せつない」という歌詞をうたう歌が「せつな系」で、CD屋さんにはそういうコーナーがあって、このコーナーのCDを買つて来て自宅でイヤホンして聴けば間違いなくせつなくなれて、泣けて、スッキリして、次に元気になる応援ソングを聞いて元気出して頑張る——これは若い人達の一部にとっては、結構リアリティのある話なのかもしれない。

「錠剤」とか「サプリメント」とか書いていて、これらも本当は相当おそろしいものだ、と思

に至る。ここには口から取り入れられるものについての「恐れ」も「怖れ」もない。本当は「食べる」ということは、何か別の生き物の命をいただくことで、それ故にこそとも奥行きのある、ほとんど生きることそのもののような厚みのある体験であつたはずなのに、現代人はこの「食べる」という行為を、単純に栄養を「摂取する」という事態だけに還元し（つまり食物からその有効成分だけを抽出し）、おいしいと感じることも、ありがたいと思うことも、省いてしまった。省いてどうするかというと、より効率的に、能率的に、自らの資源である身体や頭脳を使うことを可能にするのである。使つて何をするかというたとぶん経済活動だ。こうして食べ物、それがもたらす「効用」に還元され、自らの身体は、より経済的な活動を可能にする「効率的な身体」へと改造される。

この話を音楽に当てはめてみると、たぶん次のようになる。音楽を聴くことも、本来は純粹な喜びであつたり、他には

味わえない独特の感覚を得たりする厚みのある経験であつたはずなのに、現代では音楽に對する「恐れ」はなくなり、「元気になる」とか「泣ける」という効用だけが期待されている。駅のホームでイヤホンをして音楽を聴いている人を見ると（自分も時々そうしているから他人事ではない）、音楽は、たしかに現代においては「摂取」あるいは「服用」されているのだと思えてくる。ここには音楽体験をともにする、ということとは起らない。自分のサプリメントを人に分け与えねばならない理由はないし、第1、特定の「効果」を必要としない人にとつてそれは迷惑だから。



あるいは、こういう感覚は、ヒット曲の制作現場ではもうずいぶん前から当たり前なのだろうか。

「食品偽装」や「狂牛病」といった現代の食に関する問題のかなりの部分が、右に書いたような「食べる」という変質と関係しているとする、今年前半、一瞬世間を賑わせた「代作」問題は、実はこういう「聴くこと」の厚みの喪失と関係しているのではないかと、思う。代作を依頼した作曲家氏が書いたという曲の注文書（「受難部の楽想は宗教的アレグロ30%、ペンドレツキ70%の割合の融合」といった調子で書かれた紙切れ）を見ていると、これが音楽のもたらす「効果」だけを問題にしている人の手になるものであることは明らかだ。彼にとつても、音楽は、被災者を「慰め」たり、結果的に彼を有名にしたりする「効果」として存在している。そういう人にとつて、作曲者自身も

難聴であるという悲劇を背負っていることは、（事実であるかどうかは別として）より「効果」を高めるものであることは間違いないし、そのような「効果」自体を設計することは、実際に曲を作ることと同じくらい重要な（だから自分が書くよりも、もつと「効果」絶大なものを書くプロにそれを任せても良い）、というのは彼の側からすれば論理的に整合性がある。彼の書いていることが、なんとなく薬の調合を思わせる、というのたぶん偶然ではない。

そしてもうひとつ、余計なことを書くなら、「科学者」に「効能」ばかりを期待するのもこれと同根の問題だと思ふ。「科学」について、その知的悦びではなくて、病気の治療に役立つ、とか、これで経費が節減できる、といった「効果」しか云々しないのは、現代の病の一種であり、だから「税金使つて……」という台詞は軽々しく使つてほしくない、という③④の問題にもつながっているのだけれど、やっぱりここで紙数が尽きた。

パオロ・ボルチアーニ国際弦楽四重奏コンクール2014



大会の舞台となる市立劇場。市が全面的にバックアップし、予選入場料は無料だ。

大阪いずみホールでの激戦が幕を閉じ一週間と経たぬ二〇一四年五月二十六日、北イタリアはレヅジョ・エミリア市立劇場を舞台に、第十回パオロ・ボルチアーニ国際弦楽四重奏コンクールが幕を閉じた。

世界に両手の指の数ほどもないメイジャー級弦楽四重奏コンクールが、これほど近い日程で開催されるなど異例だ。ピアノやヴァイオリンならともかく、弦楽四重奏ジャンルで真剣にキャリアを考える三十代前半までの音楽家から成りテーパー審査を通過する水準に至っている団体が、世界に何十もあるわけではない。昨年の秋に両大会の要項が出た段階で、頭を抱えた者達も多かろう。

時差や長距離移動の疲労など予想される困難に向き合う腹を据えれば、両コンクールの掛け持ちは不可能ではないスケジュールではある。実際、大阪大会で二次予選で涙をのんだヤナ弦楽四重奏団(以下Q)と、第二部門の第二位を獲得したカヴァレリQが、両コンクールにエントリーする。東京での披露演奏会を聴き終えた筆者も、音楽家達を追いかけシベリア上空を越えた。

◆開催前の事務局側の混乱

レヅジョ・エミリア市は、北イタリアの経済中心地ミラノから古都ボローニャへと東進する幹線上にある。観光とは無縁ながら、ロンバルディア平原の豊かさを集約した旧城壁都市は、戦後ヨーロッパ室内楽を担ったイタリアQの第一ヴァイオリン奏者パオロ・ボルチアーニの故郷である。

音楽生活の中心たるオペラ劇場が瓦解した敗戦後、ボルチアーニ以下の若者らがこの地に

集まり、楽器と譜面台があれば再現可能な弦楽四重奏の練習に専念。戦禍の残る欧州各地で活動、ファシズムで世界に流出したヨーロッパの音楽伝統を維持した。若者らが弦楽四重奏の楽譜に没頭した市内の一室の壁面には、「この地でケアルテット・イタリアーノが誕生し世界に旅立った」と刻まれたプレートが掲げられている。

三年毎に開催され、今世紀になつてからは大阪の翌月開催が常だったこの大会、昨年の春頃

からゴタゴタしているという噂

が世界の室内楽界に広まった。前回、審査委員長に就任し結果に大きな影響力を振るつた元アルバン・ベルクQのギユンター・ピヒラーと、芸術監督の名

チェロ奏者マリオ・ブルネロが共に去る。「世界で最も優勝に価値がある大会」という評価の理由だったベルリンのジメナウアー事務所もバックアップを中止。

参加者応募が始まる頃には、Qエクセルシオが最高位を得た第五回以降の実務を仕切つた

みに、ジメナウアー事務所が差配してきた優勝団体ツァーはミラノの音楽事務所が担当、日本はツァーから外れている。興味深いのは審査員の顔ぶ

れだ。前回は長老の磯村和英氏(東京Q) ヴィオラ奏者でピヒラーより弦楽四重奏のキャリア

は長いを除きピヒラーに近い若手現役奏者を配した



Qベルリン東京は技術的には極めて高レベル。今後の研鑽に期待したい。

もされたが、結果からすれば「審査員がみなフランクに話し合え、とても雰囲気は良く、やりやすかったですよ」(池田)とのこと。美食の街で、大阪なら

第一部門だけの審査を一週間で行うのだ。参加者もスタッフも、なにより審査員にとっても、理想的な環境であろう。

このコンクール、各ステージでの演目選択の幅が極めて広い。例えば二次予選は、ラズモフスキー

事務局長も辞任した。共にジュネーブ国際コンクール連盟に加わる大阪とレヅジョ大会の間で日程調整が不調に終わったのは、イタリア側窓口の不在が原因のひとつのこと。

運営上の大改革を断行した前回が、成功と言いつつも難かったことは確かである。ファイナリストの順位付けを廃止、グランプリ以外は無冠とする運営陣の、「優勝」の価値を高めた意向は理解出来る。だが、優勝無しというアンチクライマックスな結果は、参加者や優勝団体ツァーを予定してた世界中の主権者を困惑させたばかりか、スポンサーとなる地元政財界にも不満が残るものだったようだ。

善し悪しではない。「コンクールは誰のため、何のためにあるのか」という本質的な議論である。ボルチアーニ家の個人的イベントとして始まった室内楽界としては重要な大会(そもそも、解散したイタリアQの楽器を与える団体を探す一度きりの

マン第三番は、生真面目さとロマン的表現が絶妙のバランスで、団体の素性の良さを感じさせた。大阪二位のカヴァレリQと共にセミアイナルまで進出したのは、十分な成果だろう。ベルリン拠点で日本人三人を含むQベルリン・トウキョウは、技術面の完璧さに合奏体としての柔軟さが加われば更なる結果も期待される。

下馬評通り、圧倒的な力量の差でハンガリーのケレマンQが優勝。既に個性が確立された団体だけに得意不得意もハッキリしていたが、文句の言いようがない結果である。個人的には、全くの無印でケレマンQに

迫つたスロヴァキアのムハQが今大会最大の発見だった。大阪のアルカディアQと並び、ヨーロッパ中央できちんと室内楽を学んだ上で、地元東欧の都市を拠点にローカル性を加味した普遍性を求めようとする新たな潮流を感じさせる二〇一四年初夏であった。



アルゲリッチ審査委員と優勝したケレマンQ。なおケレマンQは、大会参加前から来年秋の来日が決まっていた。



舞台上で結果を発表する池田菊英審査委員長。

と同様、ファイナリスト全てに順位を与える形に戻った。ちな

振るうも、室内楽界とは無縁な実務専門家である。そして審査委員長を任されたのは、東京Qのキャリアを終えた重鎮池田菊英氏であった。賞の出

し方は前々回までリッチが加わる布陣は不安視

揮といかなかつたヤナQのシユ



公益財団法人日本室内楽振興財団 支援企業



大阪ガス株式会社
関西電力株式会社

アサヒビール株式会社
サントリーホールディングス株式会社
ハウス食品グループ本社株式会社

非破壊検査株式会社

大塚製薬株式会社
住友化学株式会社
積水化学工業株式会社
武田薬品工業株式会社
日本ペイント株式会社

三洋電機株式会社
住友電気工業株式会社
ソニー株式会社
株式会社東芝
日本電気株式会社
パナソニック株式会社
株式会社日立製作所
富士通株式会社
ローム株式会社

東洋紡績株式会社
株式会社ワコール

近畿日本鉄道株式会社
京阪電気鉄道株式会社
南海電気鉄道株式会社
西日本旅客鉄道株式会社
阪急電鉄株式会社
阪神電気鉄道株式会社

株式会社近畿大阪銀行
株式会社みずほ銀行
株式会社三井住友銀行
三井住友信託銀行株式会社
株式会社三菱東京UFJ銀行
株式会社りそな銀行

伊藤忠商事株式会社
岩谷産業株式会社
株式会社千趣会
三菱商事株式会社

株式会社JTB西日本
株式会社電通
株式会社ニュー・オータニ

住友生命保険相互会社
東京海上日動火災保険株式会社
日本生命保険相互会社
三井生命保険株式会社

川崎重工業株式会社
株式会社クボタ
新日鐵住金株式会社
ダイキン工業株式会社
日立造船株式会社
三菱重工業株式会社

KDDI株式会社
西日本電信電話株式会社

野村證券株式会社

株式会社日建設計

株式会社読売新聞大阪本社
株式会社読売新聞東京本社
日本テレビ放送網株式会社
読売テレビ放送株式会社

株式会社大林組
鹿島建設株式会社
株式会社きんでん
株式会社鴻池組
清水建設株式会社
大成建設株式会社
大和ハウス工業株式会社
株式会社竹中工務店

(関連業種別50音順)

平成26年度 第1回理事会開催



理事会

平成26年度第1回理事会が、平成26年6月16日(月) ホテルニューオータニ大阪で開催され、秋山会長の挨拶の後、越智理事長が議長となり、平成25年度の事業報告並びに決算報告が審議され可決承認されました。また、平成26年度定時評議員会の招集と議題についても可決承認され、最後に事務局から5月に開催された「第8回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」についての報告がありました。

平成26年度 定時評議員会開催



評議員会

平成26年度定時評議員会が、平成26年6月26日(木) ホテルニューオータニ大阪で開催されました。越智理事長の挨拶の後、評議員の互選で村上仁志評議員を議長に選出、先の理事会で承認された平成25年度の事業報告並びに決算報告が可決承認されました。評議員1名の選出についても可決承認され、改選期に当たり理事・監事が選任されました。

- 新任理事 藤本 宏樹(住友生命保険) 福田 里香(パナソニック)
小城 敏(読売テレビ放送)
- 新任評議員 藤門 浩之(読売テレビ放送)
- 退任理事 吉江 安生(日本室内楽振興財団 常務理事)
浦上 敏臣(住友生命保険)
小川 理子(前パナソニックブランドコミュニケーション本部)
- 退任評議員 牧野 立太(読売テレビ放送) (敬称略)
- なお、常務理事には小城敏が就任しました。

C O N T E N T S

座談会
第8回「大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」を振り返って
司会: 日下部吉彦
出席者: 原口啓太/梅本俊和/瀧本麻衣子/玉越邦彦1
第8回コンクール&フェスタフォトメモリー7
グランプリ受賞団体
第1部門9
第2部門10
フェスタ部門11

楽団探訪
京都フィルハーモニー室内合奏団12

音楽雑感
音楽の「効果」と代作問題
伊東信宏13

レzzoの再改革
~パオロ・ボルチアーニ国際弦楽四重奏コンクール2014~
渡辺和15

JCMF NEWS17

グランプリ・コンサート201417

公益財団法人日本室内楽振興財団支援企業18

表紙はオペラハウス ライプツィヒ(ドイツ)

グランプリ・コンサート2014

アルカディア・クアルテット(ルーマニア)
Arcadia Quartet (Romania)



「グランプリ・コンサート」は、3年毎に開催している「大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」の優勝団体を招いて全国10地区で公演を行っています。
今回は5月に開催した「第8回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」第1部門(弦楽四重奏)で優勝したルーマニアのアルカディア・クアルテットが次の日程で演奏会を行います。

■開催日程■

札幌	10月30日(木)	STVホール
三重	11月 1日(土)	三重文化会館小ホール
熊本	11月 3日(月)	益城町文化会館
大分	11月 5日(水)	別府大学大分キャンパス文化ホール
広島	11月 7日(金)	庄原市民会館
東京	11月 9日(日)	津田ホール
鳥取	11月11日(火)	県民ふれあい館
高岡	11月13日(木)	富山県高岡文化ホール
京都	11月15日(土)	銅駝会館
大阪	11月17日(月)	いづみホール

- 全国共通■
- 主催/ 公益財団法人 日本室内楽振興財団
 - 協賛/ ダイワハウス・TOYOTA
 - 助成/ 公益財団法人 ロームミュージックファンデーション
 - 後援/ 在日ルーマニア大使館

異国文化に身を任せれば 新しい発見や刺激に心癒やされる旅

高度に管理された社会、溢れる情報に左右される生活、パターン化された日常。
現代に生きるということは、ストレスを抱えることと同じなのかもしれません。

気分を変えて、海外へ出かけてみませんか？

異国文化、異国情緒といった非日常に身を任せると、
新しい発見や知的刺激を受けてすっかり心癒やされてしまいます。
日常のストレスも忘れて、気分もリフレッシュされることでしょう。

私たちJTBは、世界各地にちらばる癒しのスポットをご案内し、
旅のお手伝いをいたします。



**JTB西日本
海外旅行西日本支店**

〒541-0058 大阪市中央区南久宝寺町3-1-8(本町クロスビル9階)

TEL.06(6252)2711(代) FAX.06(6252)2790

担当:飛松 智久

●編集・発行／公益財団法人 日本室内楽振興財団

〒540-8510 大阪市中央区城見2丁目2番33号 読売テレビ内

TEL.(06)6947-2183 FAX.(06)6947-2198

ホームページ <http://www.jcmf.or.jp>

e-mail zaidan@jcmf.or.jp

Vol.42

平成26年10月27日